

今保育園では、節分に向けて子どもたちがそれぞれに味のあるお面を作って飾ったりお面であそんでいます。りす組さんには大きな口をあけた鬼がいて、子どもたちは鬼さんの口の中に新聞紙で作った豆やボールを食べさせて遊んでいます。かばの 2 歳児さんとぱんだ組さんたちは、大きな鬼を作って、その鬼に向かって豆を投げて大盛り上がりしていました。

各クラスそれぞれに楽しい鬼のお面を作り、それを頭に付け鬼のつもりになって遊び、節分に向けて楽しんでいます。

2 月 3 日の節分当日は保育園に怖い鬼がやってきます。子どもたちと豆まきをして、無病息災を祈りたいと思います。

命のはなし ―あかちゃんが産まれるまで―

ぞうぐみの子どもたちを対象に、助産師をしているどんぐり 0B の山形さんに「命のはなし」をしていただきました。

子どもたちは、あかちゃんが産まれてくるまでの紙芝居を見せてもらったあとに、自分の心音の速さとあかちゃん的心音の速さの聞き比べを体験したり、はがき大の黒画用紙に針で穴をあけたものが手渡され、「自分の一番はじめの大きさはこれくらいだったんだよ」と教えてもらうと「え〜!?!」「お母さんに言おう」…など驚いていました。



このあかちゃんが少しずつ大きく、重くなった実物大のモデルを見せてもらいながら、実際に抱っこし、あかちゃんの重さを感じとっていた子どもたちでした。



山形さんから子どもたちへのメッセージ

- ・一人ひとり、待ち望まれて生まれてきた世界でたった一つの大切な宝物である。
- ・お母さんのおなかの中で 10 カ月いて、頑張って生まれて来たこと。
- ・命を大切にすること。それは自分自身を大切にすること。
- ・周りの人も大切にすること。

以前中日新聞のコラムに掲載されていた詩の紹介です。

お母さんは 毎朝/カンジキをはいて道を作ります/家の戸口から/雪の原を横切って/ふみしめ
かためる細い道/お母さんの体の幅の道/子どもはこの道を通して/学校にいきます。
転ばずに歩けるお母さんの道を/子どもは忘れないでしょう/おとなになって/人生の道に迷うとき/
なおなつかしく/思い出すでしょう 高田敏子 「雪国の朝」

これは、福島原発事故で避難した先の学校でいじめに遭った少年が「お父さんも仕事見つけて頑張っているから、僕も頑張る」として、「死んだら何も言えない。絶対助けてくれる大人がいる。苦しいけど、死を選ばないで」と呼びかけたことに対して、この詩が紹介されました。 子どもたちには懸命に生きているお父さん、お母さんの姿が伝わっているのでしょうか。「命の話し」を機に紹介させてもらいました。